

<全国納税貯蓄組合連合会会長賞>

## おかげ

会津若松ザベリオ学園中学校 3年 内山 紡

世の中には、自分以外の誰かが払ってくれるから税金を払わなくてもいい、と考えている人がいるそうだ。だが私はその考えに同意することができない。自分が税金を納めないということは、誰かが納めた税金のおかげで教育を受ける。誰かが納めた税金のおかげで病気の治療を受ける。つまり、誰かが必死になって稼いだお金で生きることになる。「おかげ」が多すぎても、私だったら申しわけないという罪悪感を感じるだろう。

私は幼いころ、小児ぜんそくを患った。苦しくて、息も思うように吸えず、入退院を何度もくり返した。だが、病気中のことを思い出していた時、ふとこんなことが頭の中に浮かんだ。「もし税金がなかったら」

私がそう考えたのには理由がある。それは、私達が払う税金の使い道の中に、「医療費助成制度」というものがあるからだ。医療費助成制度とは、その名の通りけがや病気の多い子供、高齢者に対して医療費を免除したり安くする制度だ。税金がなかったら同時にこの制度もなくなることになる。そうなれば私は十分な治療を受けられていなかったに違いない。通院や入院のたびに多額のお金がかかってしまう。だから、命にかかわる重症でない限り自宅で症状がおさまるまで何とかしていただろう。想像するだけで苦しさがこみ上げてくる。

こうして私が今、家族と一日中一緒に過ごして、友達とたくさん遊んで笑いあえるのも、幼いころにきちんと病気を治すことができたおかげだ。最近では全く小児ぜんそくの症状が出なくなっている。そして、この治療を受けられたのも、どこかの誰かがルールを守りきちんと納めてくれたおかげだ。

人生は、三つの時期に分けられる。一つ目は、教育を大人の「おかげ」で受ける時期。二つ目は、された「おかげ」とその先される「おかげ」を必死に働いて返す時期。

そして生きるために年金を若い人の「おかげ」でもらう最後の時期。私はこのサイクルが人生をよりよいものに行っていると感じる。誰もが、「おかげ」を感じすぎず、感じなさすぎず、幸せに暮らしてゆける。私はあと八年ほどで「おかげ」を返す時期に入る。不安や苦しいことばかりだと思う。しかし、幼いころの自分にされた「おかげ」をよく思い出して、税金をきちんと納める大人になりたい。